
暗運希空 終わりのなきサイクル

愛夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗運希空 終わりになきサイクル

【Nコード】

N4485S

【作者名】

愛夢

【あらすじ】

少女と一人の少年「海斗」とのファンタジー

とどかぬ思い

はてしない闇の世界、手を伸ばしても届かない光
どうしようもない暗黒の国世

憎悪は日に日に増してゆく、心の中におもく魂となつてのしかか
つてくる

赤みをおびた瞳はなにもない空をみつめつづけていた。

「海斗様、私はあなたを信じております。今もずっと」

その言葉を合図に暗闇からひとすじのあわい光があたりを悲しく
てらした

「ああつ光、またこの光もスグきえるのだろうか、」

少女の目の前をゆらゆらと不規則にとびまわり、つっともりを
消した。

「やつぱり、仕方がないのだろうか。」

そついうと1羽のセキレイをうみだし、なにもない空上へ打ち上
げた。届かないとしりつつも、

海斗は少女の声で目が覚めた、

ひどく悲しい声の少女、切ない

「チツ、なんだよ」

汗だくの体をタオルで拭きながら夢を思い出す。

最近、毎日見ている夢少女が自分を「様」づけで呼ぶ、いつもそ
の少女がセキレイをとばすところで目が覚める。

自分が特別な人間だと言うことは知っていた
なぜだか分からないでも自分が何においても特別にあつかわれて
いる。

親などいない、友などもつくったこともつくろうと思ったことも
なかった、自分一人で生きていた。

でも、あの少女が気になってしかたがない。

海斗は、手元にあつたするどいハサミをひろいあげ刃先をまじまじとみつめ指をすべらすと紅い血が指とハサミをつたい床にたれていく

「こんなことなんてしても意味ないのにな・・・」

そついうと自分の腹にハサミを勢いよくつきさした。

無表情のままハサミを引き抜く

するどい刃先から血がたれる。

腹には赤黒いハサミの穴があいている

その穴はじわじわと小さくなり、とうとう消えた。

「ハア・・・」

ため息をつきキツとあたりをにらむ

自分をこんな体にしやがった母親、おかげで俺は、死ぬことすら出来やしない

どんなに血が流れても、どんなに切り刻まれようと十秒あれば治ってしまう。

痛みなど感じない穴のあつた腹に手をあて目を閉じて小さく、つぶやくように小歌をうたいと見える。

その様子を窓辺1羽のセキレイがみつめている

その口は確かにうごいた

お兄さま・・・と...

美しきセキレイ

「声は届かないのだろうか、」

つぶやきつつも心の中では分かっていた、届いていないと、セキレイがあちら側にとどく確立は限りなく低い、ほぼ0に近いだろう、届いたとしてもたどりかなければ意味はない

だからと言ってセキレイをつくり、飛ばし続ければ、自分も危険な状態になる。

唯一この空間に光が迷いこんだ時にだけにしかつけない鳥『セキレイ』

たいてい光はこの空間へ迷い込めばすぐに輝きを失ってしまう

「まあ、海斗様がつくりだした光が迷うことがあれば私はこの空間から救われるのだけど、」

だって、必ず光は主のもとへ戻るのだから。

その時、1羽のセキレイがヘトヘトになりながら戻って来た

セキレイは少女の差し出した指へとまると自ら1本の羽根を引き抜いた

そしてそれを少女へ渡す

「ありがとう、お疲れ様、あなたが初めてよ。生きて戻って来たセキレイは次も、また、頼むわね・・・ゆつくり休んで・・・」

そついうとセキレイを優しく片手で包み込み残りの片手で指をならした。

セキレイは、魔法かまじないのようにみごとに消えた

そしてさっきの羽根を次は両手で強く握りバラバラに、小さく、細かくちぎっていく。

そしてそれをツーツと吹き飛ばすと、セキレイが見たものが全て映像となり映し出されている、

腹をハサミで思いつきり、ためらわずに切った海斗様、

その後に歌う小歌、なつかしい

今は記憶の5分の3が消滅している海斗様、イエ、『海兄様』その歌は私が幼い頃、自分に対して歌い続けた歌

「兄様その歌を歌ってはなりません。」

呪われた歌など歌わないで・・・暗運と言う名の呪われた歌を
悲しみのうたを

「おやめください・・・」

暗運

夕闇の女王が一人の子に呪いをかけました

歌が好きなその子はその日から歌が歌えなくなりました。
でも、その子供は、女王の気まぐれな呪いを・・・

歌の歌えない悲しみを・・・

怒りにかえて、

必死に、

必死に

うたいます

どんなに暗い運だって

だんなに悲しくたって

時はいずれたつのです

もう、明日などないと思っていようがいまいが

その子は歌を歌えない

悲しみのフチの裏で美しい花などさきません

もう一度

もう一度

どうか、どうか

この歌を歌わせて

この歌のとうり

その子の運は暗く染まって行くのだから、

おやめください！

まただ

「ッもう聞きたくねえ」

耳を塞ごうとするが泣こうとするがそんなことじゃ限がない。

苦しい、消えたはずの苦い過去

いや、消された記憶、よみがえる、あふれる

少女の悲しくも美しい声を聞きたび

思い出すは残酷な血しぶき

「やめろ！もう、二度とみせるな！！」

頭の中に狂うあの少女が叫ぶ姿が写る

ベッドで頭を抱え、耳を塞ぎふるえる自分

「やめろッ・・・やめろおおー！」

「ハア・・・ハア・・・はあ」

あらい呼吸をしながらT-シャツの胸元をギュツと握る

「く・・・っなんだよ、なんなんだよ！糞野郎！」

体中、汗がふきでている

「たのむ、もう、見せないでくれ。」

どうして母親は俺から一部の記憶を消したのだろう

すべてを教えてもらおうじゃないかッ！

データ消滅者のたくらみ

少女がセキレイを飛ばしたのを、ある所で水晶から見ていた者がいた

「フフフツもはや翼のない天使ね、海斗さえいなければこっちのものよ」

「母様あなたはツ・・・それでもあいつらの親ですか!？」

「なによ陸斗、あなたが海斗とかかわってもいいのよ？」

「それは・・・」

「でしょ、しょせんそんなものよあなたは」

「ツ!？」

「陸斗、はじめはあなたでしようと思ったわでも」

言葉がとまった

少しためらい、足元を見てはなす

「・・・あなたは純粹すぎた、脳内データを消せなかったの・・・」

「・・・」

「まあ、今も夢音と入れ替えようか迷っているけど天音は」

残酷な母親、父親を事故にみせかけ殺し、今は自分の子供達を苦しめ、遊んでいる

「陸斗、ちよつと来て・・・」

手招きをする夢音は体をドアで半分以上隠している

「何？」

傍によると

「いいから!」と強く手をひっぱり陸斗を部屋から引きずりだした

静かな廊下

パタパタと歩く音が響く

「はいつて」
「ああ。」

そこは408号室

唯一防犯カメラと盗聴器がない部屋
入って一息つくと夢音は話し出した

「海斗の家が分かったの」

何処に持っていたのか、ファイルから一枚の紙を渡した
「今から行こう」

真剣な夢音、
うなずくほかはないだろう

海斗に全て話してやる、ばらしてやる

そして天音を助け出し、母を裁いてやる！

そうなった時あの化け物はどう考えるだろう
今に罪を認めさせてやる

俺の脳内データが消えなかったのは海斗が助けてくれたからだ
純粹など馬鹿らしい

演技など飽きてしまった

「夢音、演技をやめた俺をどう思う？」

「・・・前よりずっと勇ましい！」
なにが純だ

あの女はもう人間ではない

アイツが殺したのは死年をつかさどる神だ

特殊なやりかただったのは気づいていたからだろうか・・・

イヤ、気づいたはずはない、生をつかさどる神がここに2人存在
するのだから

海斗おまえの力で復讐しろ！

死をつかさどる神よ、2人が出会ったときあの化け物は裁きを受

ける

2人は窓から下へ飛び降りた
身軽に夜の中をはしる

海斗！其の名を呼びつつ、2人の神が動き出す。

2つの神

うなりつづける海斗

「やっやめろ！」

夢の中ロツクのはずれる音

叫ぶあの少女

手に、握られているのは刃、

「やっやめろ！あつ天音！」

自分の声で目が覚めた。

「あ、ま、ね？」

夢の中で叫んだ少女の名前

天音その名を聞くと、心がえぐられる痛みがはしる

「いたいかな？海斗、」

目の前にいたのは陸斗と夢音、いつの間にか立っていた
研究所では大騒ぎになっているはずだ、ここに来る途中、探し回
る巡使の姿を多くみた。

「だっ誰だよ！」

2人はあれから2日かけてここについた

「思い出せ、死の神よ、お前は誰だ？」

「かい、と」

何故だかもれる自分の名前

自分の名前を口にしたとたん体に痛みがはね上がり海斗を苦しめた
「うう・・・あああああああつあああああああああ

頭の中をめぐる記憶、思い出していく過去

「うわあああああああああああああー！ー！

やめろ！陸斗！思い出させるな！」

のたうちまわる体、イタイ

「海斗、痛いのはわかる、でも、おまえの記憶がもどらなきゃ天音を救えない、」

「ぐっ、ああ、んっぐっあ、あ、天音！ぐっ、つくっそおお！！」

「死神よ、力の使い方を思い出せ。」

「無理だよ！！、ああああああ、んっぐ、ハア、ハア、フー、」

息を整え顔を上げた海斗は別人だった。

「バイバーイ」

そお言うとき陸斗へカメラ先を向けた。

神を思い出したとたんカメラが、死神のシンボルがあらわれていた。

「ちっ、あぶねっ」

思い出したのは極一部、一番荒れていたときの海斗。

「陸斗！」

叫ぶ夢音に、

「うるせえー夢音！ この偽善者が！！」

そういつて闇の管をつくりだし、そこに夢音を入れてしまった、そこに入ればもう出口はない、

海斗がだしてやろうと思わなければ一生出られない場所、裏の地獄。

「夢音！」

「おまえは自分の心配すればw？」

そういつてカメラをおもちやのようにふりまわす海斗

「少し遊んでくれよ陸斗、ちょっとしたゲームをしない？」

ゲーム始動

ニヤつく海斗を陸斗は思う。

こいつ、本物か？

目の色が紫じゃない、色が・・・瞳の色が黒に戻っている、なの
に神？ということだ・・・

考え込む陸斗を水晶からのぞく1人の女

「フフフツ、そんな簡単におわらせられるか」

ニヤつと笑う女の後ろに2人の男、

「楽しませてね、我が子達・・・」

そう言つて別の水晶に目をやった。

手をかざしその手をぎゅっと握ったとたん、水晶の中の天音と夢
音の顔が苦痛にゆがむ。

水晶の後ろの水管、中には本物の海斗が、多くのチューブにつな
がれ、規則正しく呼吸を繰り返していた。

女は2人の男を退室させた後、静かに水管へ近づき、手をペタッ
と近づけほおをよせてそこからもう一度、水晶をのぞき見る。

「ゲーム開始の鐘を鳴らそうか」

笑っていてもどこか悲しい目の女、

この建物内に居場所はない。

愛しいなど生ぬるい、そう思わなければ・・・

今こそ、死がある、一族全ての、
悲しみの涙を流す事など夢のまた夢。

さあ、ゲームを楽しもうか。

陸斗、お前の脳内データの一部はここにあるからね・・・

裏の地獄（前書き）

残酷描写あり、書いてても怖いくらい（泣）

個人差ありますので、見たければどうぞ（笑）

裏の地獄

「ゲーム・・・だと？」

「ああ、こっちの勝利は確定してるがな」

「!？」

驚く陸斗にニヤツと海斗は笑みをこぼし、指をパチンッと鳴らした。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアッアアア」

とたんに響く悲鳴が頭に響く、共鳴し、頭が割れるような頭痛がした。

「ッ・・・何だよ!ッ」

クスクス笑う海斗

「見たいか？何が起こっているのか」

そう言くと、鎌を自分に突き刺し、流れ出てくる一滴の血を指にとってなめた。

「見せてやるよ」

そう言くと、鎌についた血を全てなめきつた。

そして、海斗の唾液と、少し血の残った鋭く男とは思えないほど、美しく整った爪を陸斗の額に深々と突き刺した。

「ぐえっ」

うなつた陸斗だが、痛みを感じることはない。

とたんに流れる、2人の映像・・・

狂ったように叫んでいる。

「なっ何をしているんだ!二人は!」

クスクスと笑う海斗は、無邪気に、贈り物を貰った子供のように

笑った。

「2人はものすごくいたゝい思いをしているみたい 可らしい
ねえゝ神様なら痛くないのにねえゝ

誰かが痛めつけてるみたいだね

まあ、俺がやったんじゃないから、分からないけどねゝ

でも、俺に命令してくる奴がいるんだっ

そいつがこう言っている『陸斗をそこへ入れるッ！！！』ってね
2人を助けたいんでしょ？だったら、入ってよ」

だんだん幼い声になっていく海斗・・・

「お前、すぐびびったりするよなあゝつけるよなっどっする？行
くのか、行かないのかあ？」

むつとした陸斗だが、さっきの海斗の言葉に嘘はないだろう。命
令を送ってくる奴がいるとすれば、監視されている可能性が高い。
演技に取り掛かるしかないな・・・

「いつ・・・行くよ。」

笑う海斗は陸斗を闇へほうりこんだ。

闇は大きく口を開け、しばらく消えることはなかった。

「まあ、精々（せいぜい）頑張りなよ」

「うふふふふ・・・あはっあはっはは」

大爆笑の4人の母、と言う皮をかぶった化け物。

水晶を手に取り、少女のようにひざを丸め、冷たく笑う。
目は死んだような底なしの黒。

口は笑うことしか出来ない人形のようになっていた。

海斗（前書き）

こんにちはあ~~~~。

ゆうみや の友達の 輝奈 です。

今回は私が変わりの更新しました

まあ、源本を書いてから更新してるので中身は変わりません。

これは2人で考えてるものでして、私もアップさせてもらってるので、暗運希空の短編版を私のほうで出すかもですね。

2人でもつといい作品描くようにがんばりますね

海斗

ポコポコと水管で息をする海斗の目は、化け物の笑い声によって見開かれた。

「僕、何をしていたんだろう?」

疑うことを知らないきれいな瞳

水管をドンドンと叩き化け物をきずかせた。

「あれ? 起きちゃったの? まあいいか。」

そういつと水管から海斗を引つ張り出した。

「ありがとう、お母さん。」

バスタオルを無言で掛けられた海斗は、なにか不思議そうな顔をした。

それでも、何も言わず体を拭き服を着た。

「あら、おわった?」

その声を聞き安心したのかニコツと笑い、勢いよく頷いた。

「うん!!!!!!!!!!!!!!」

キヤツ、キヤツと笑う海斗。

こいつの時は10歳で止まっている。

化け物はニヤツと笑うと優しく言った。

「海斗、病院いつて注射しようか。」

「ナゼ?」

ギモンの顔に不安はない。

そのことに罪悪感が胸をよぎる。

そんなこと、そんな感情など生ぬるい。

「海斗はズーとココで寝てたのよ。水管で。だからよ。」

「そっか、じゃア行こうよ。注射って痛いのか？僕、がんばるよ。」

「うん、とっても痛いみたいだけど、痛くないように麻酔、入れてもらおうね。」

「分かった、行こっか、お母さん。」

そう言って水晶部屋を出た。

「ツチ、ドコだよ。すぐに悲鳴が聞こえると思ったのに。」

イライラしながら陸斗は暗い暗い闇の中、白銀の光を作り出し辺りをリンリンと照らす。

「ああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
もう!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
探して来い!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

また、陸斗はもう2つの白銀の光を作り別々の方へ勢いよくブン投げた。

「ツツツツツ！？」

グルルルルル
.....
・
・
・
・
・
-
-
-
-

「番犬か！！！！！！！！」

番犬に追い駆けられ走る陸斗を誰も知らない。

「ここ?」

「ええ、そうよ」

「よしっ!!!がんばるぞ!!!!!!」

顔が少し緊張している。

愛しい、愛しい我が子。

.....

そう思ってはいけない.....

ベットに寝かされ麻酔を打つ。

大きなあくびをしたかと思うとトロトロと眠り込んでしまった。

「ふう、これでいいわね。ありがとう。」

「結構早かったんですね、起きられるのが。」

「そうね。まあいいじゃない。」

準備は整ったよ海斗.....
もうスグこっちの海斗は痛みが体を駆け巡る、顔が痛みで歪んでくるだろう。

自分を取るか。

兄弟を取るか。

選ぶといいわ。

「たのしみね。」

心にもない言葉を並べる。

でも、悟られてはならない、満面の笑みで笑う。

あなたの記憶は戻す、神の力もね.....

。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4485s/>

暗運希空 終わりのなきサイクル

2011年10月8日23時35分発行